

平27年10月3日

平27年度 第2回 一関医療と介護の連携連絡会議研修会

医療の立場から

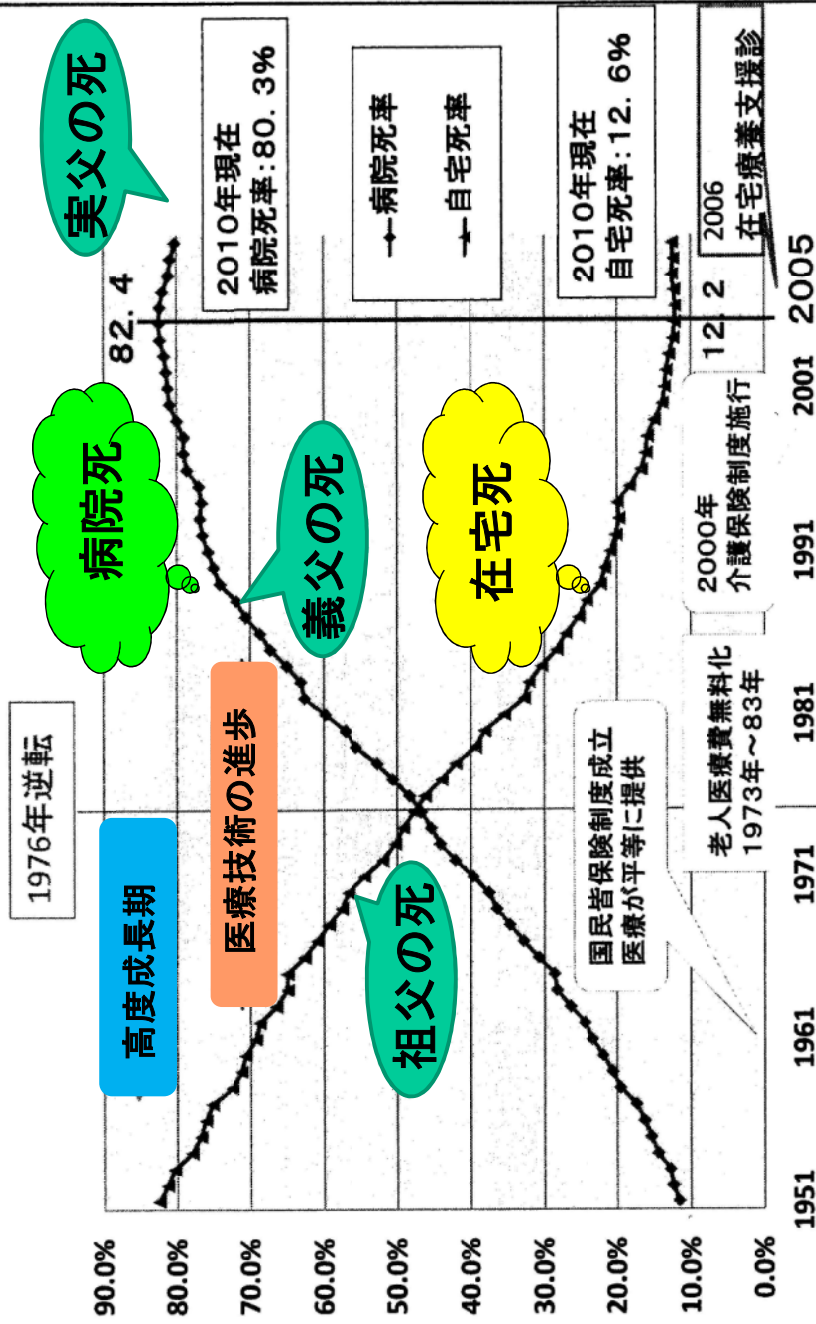
～がん患者さんと家族が安心して自宅で



生活できるよう支えるために～

一関病院 緩和医療科
佐藤 隆次

病院死・自宅死の年次推移（2010年まで）

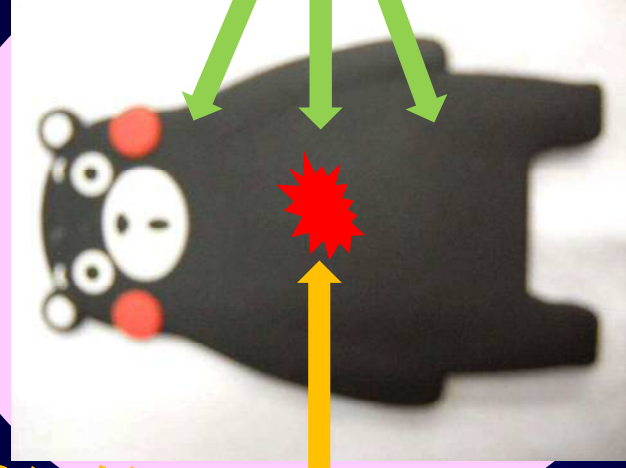


病院死＝病院＋診療所＋助産所

平成22年 人口動態調査

1C 上巻 死亡 死亡の場所別にみた年次別死亡数

従来の治療
急性期治療

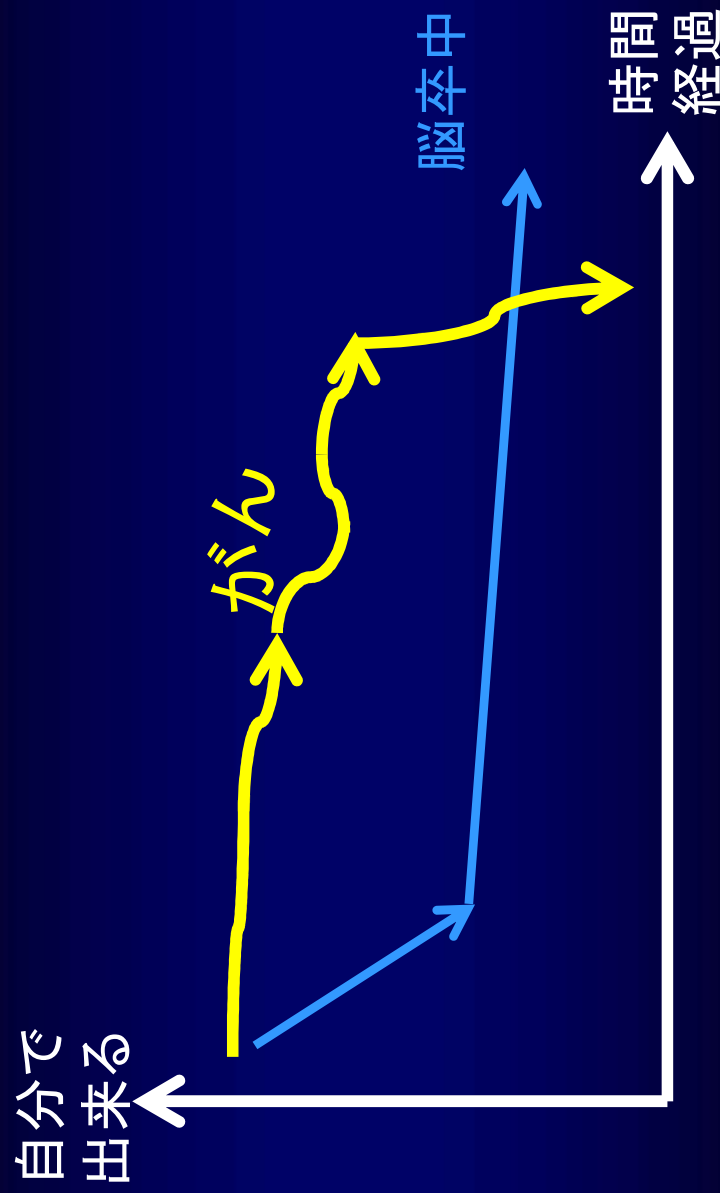


疾病に
対しての
治療

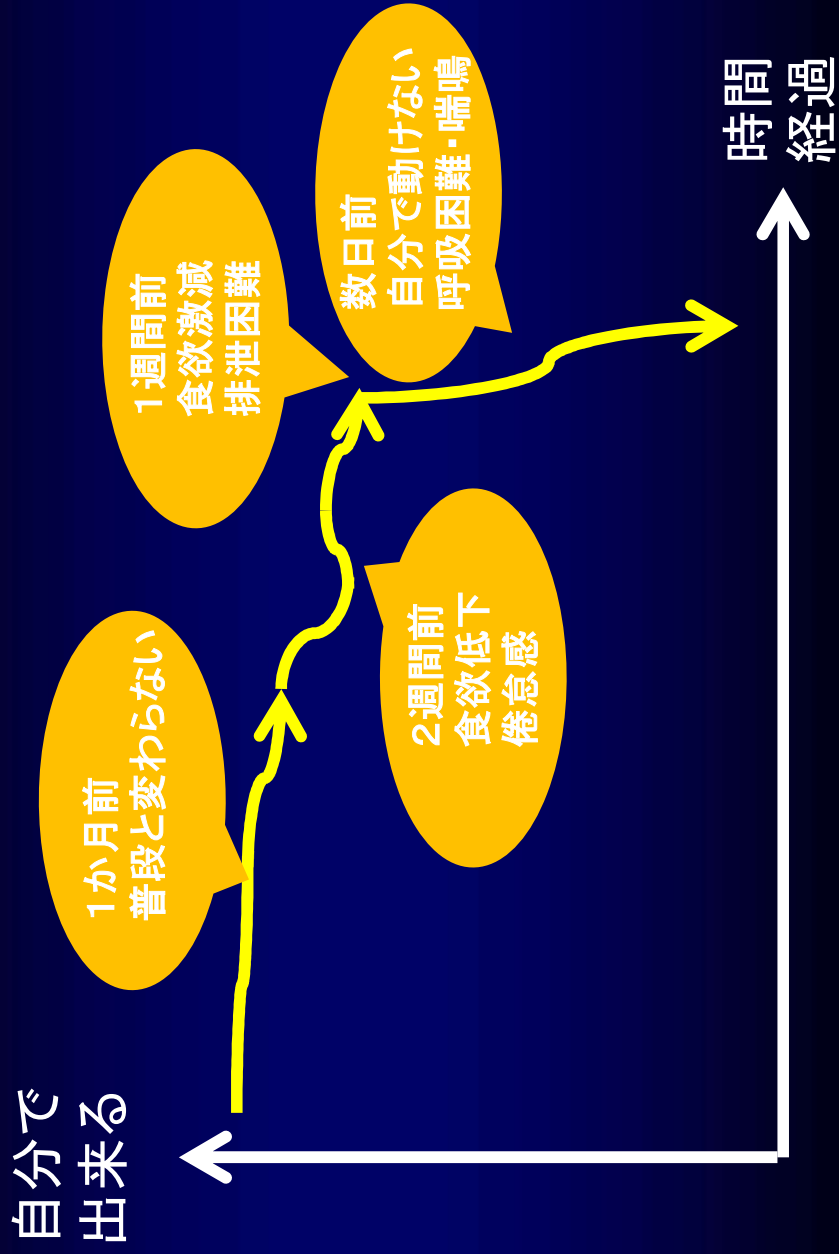
緩和医療
緩和ケア

疾病を
持っている
人への
治療

「がん」の病状の進行

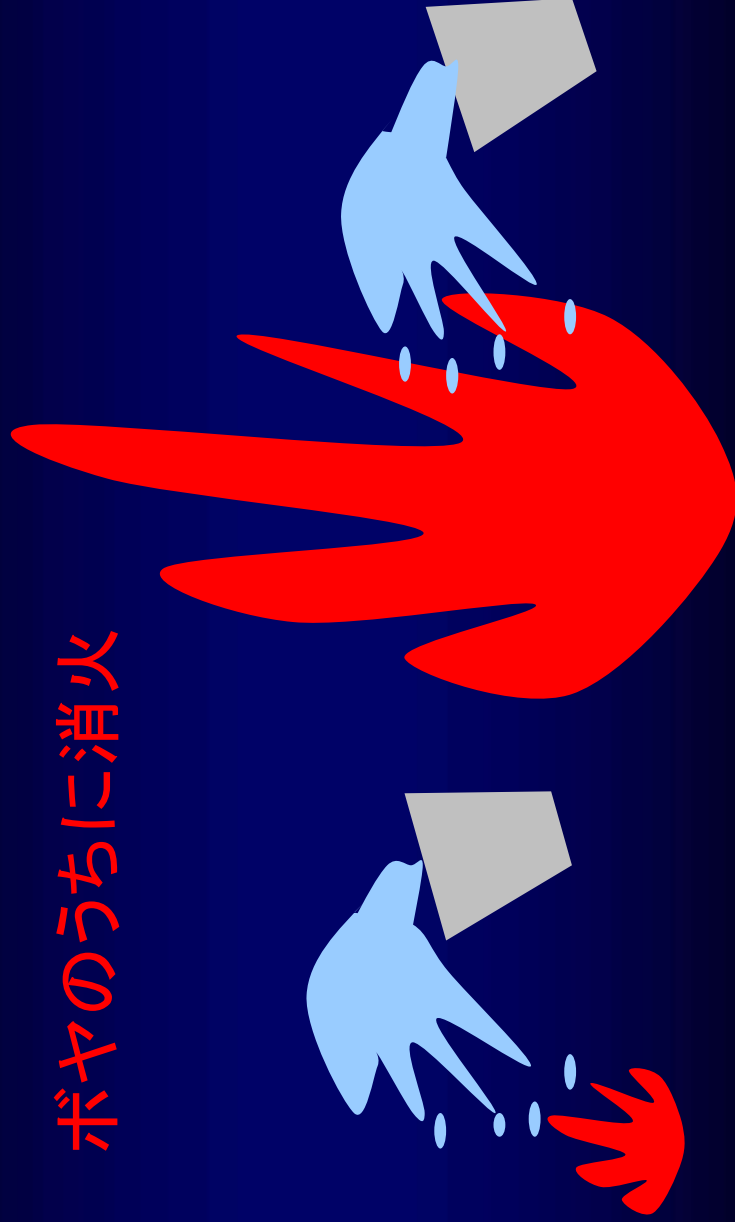


がんの具体的な進行経過



「弱いうちの痛み」と「強くなった痛み」

ボヤのうちには消火



モルヒネの誤解

モルヒネを使うと間もなく死んでしまう

モルヒネは命を縮める

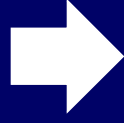
モルヒネは死の間際に使うもの

どうせ、だんだんと効かなくなってくる

薬物依存が出て、中毒になる

医療用麻薬の説明

強い痛み止めを使いましょう



痛みの程度に応じた

痛み止めを使いましょう

食欲不振



終末期の食事

見舞い客

こんなに痩せて！
ちゃんとあずがっ
てんのが！

患者

食いてんだけど、
こええし、さっぱり
食われねえ

家族

食わせねばなんね！
食って元気になって
もらいたい！

医療者

病気が進んで、食べら
れない時期なのに・・・
患者も家族も辛いなあ

家族が恐れていること

食べなければ死んでしまう！
食べさせること イコール 愛情
患者に食べさせることが仕事
罪の意識と非難

終末期の点滴

見舞い客

こんなによせて
なして点滴をしないのか！

患者

針さされるのも
痛いし、なんだが
呼吸が苦しいなあ

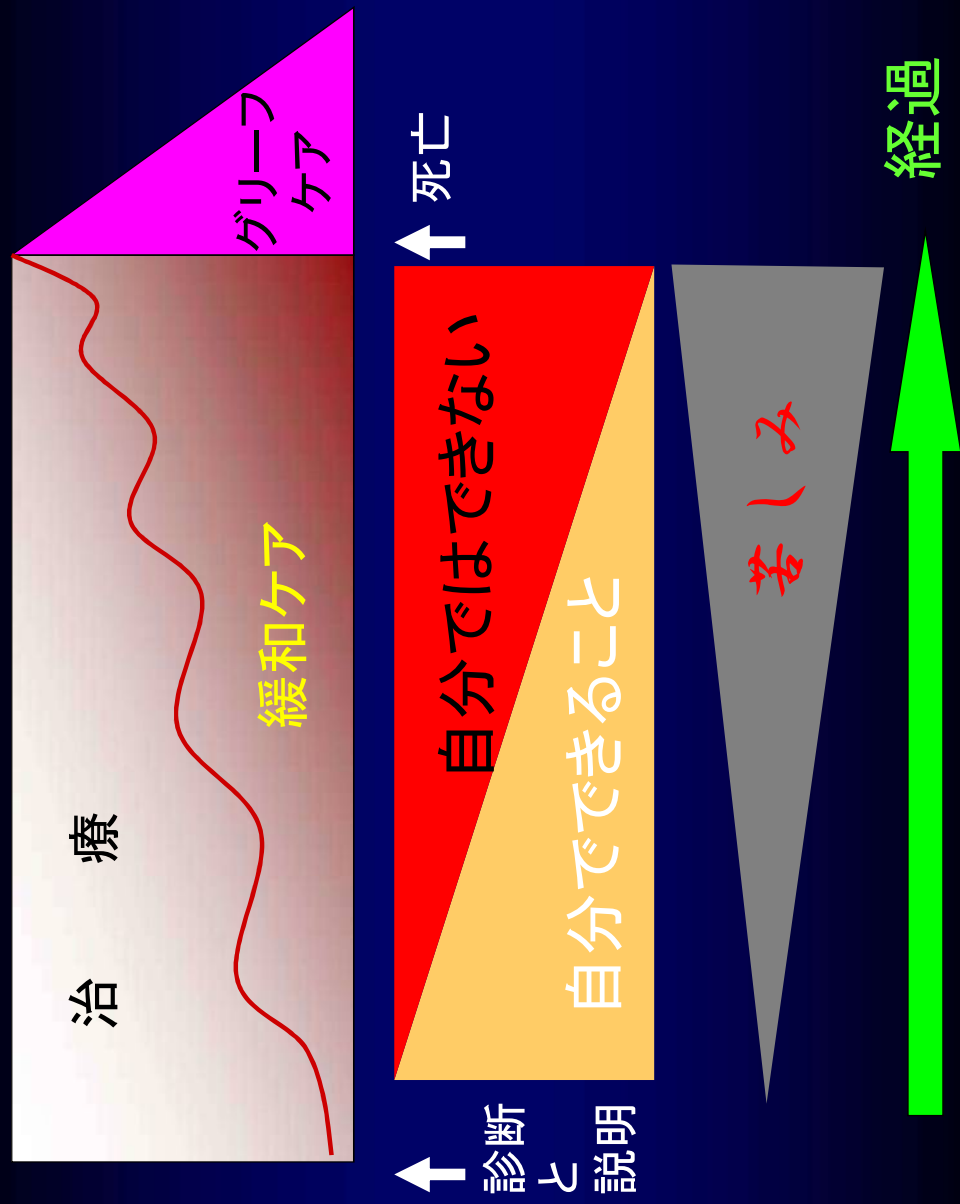
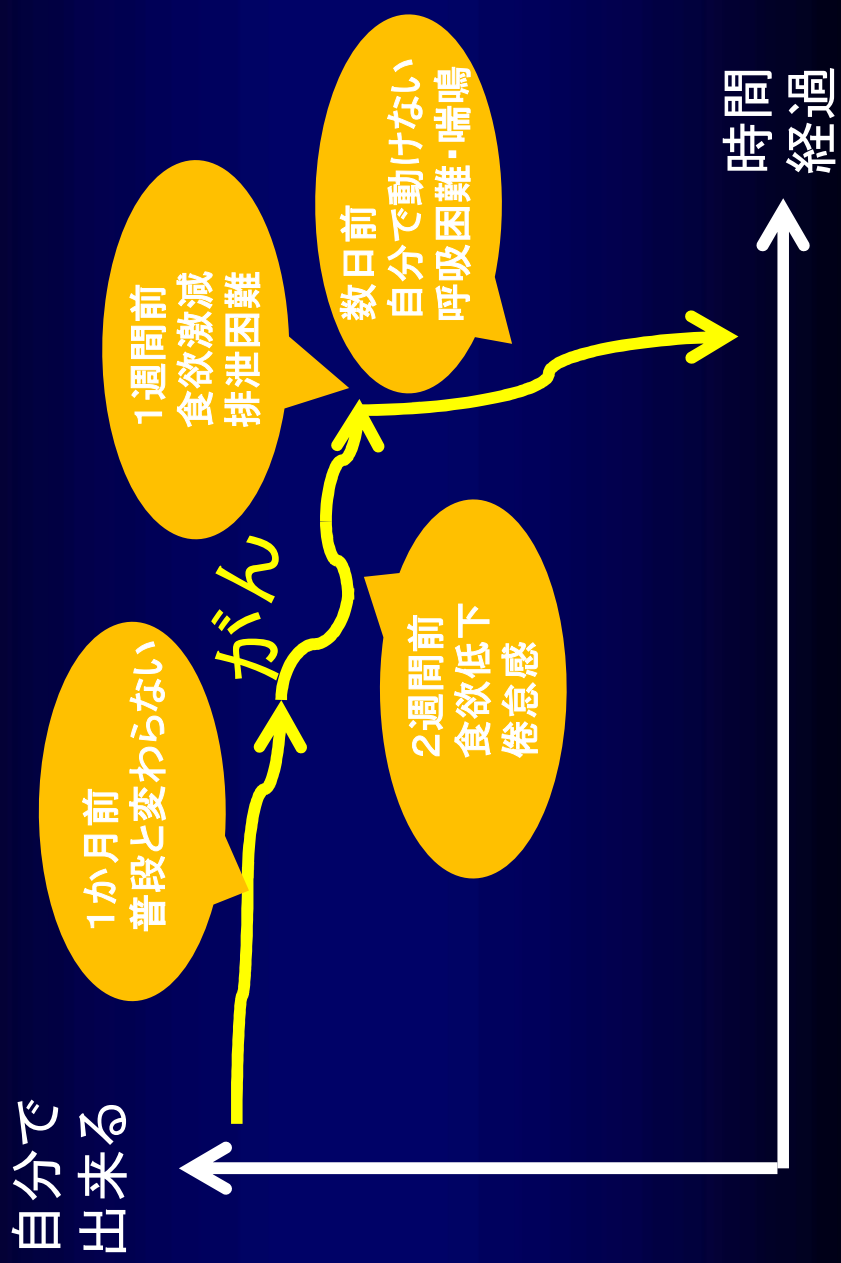
家族

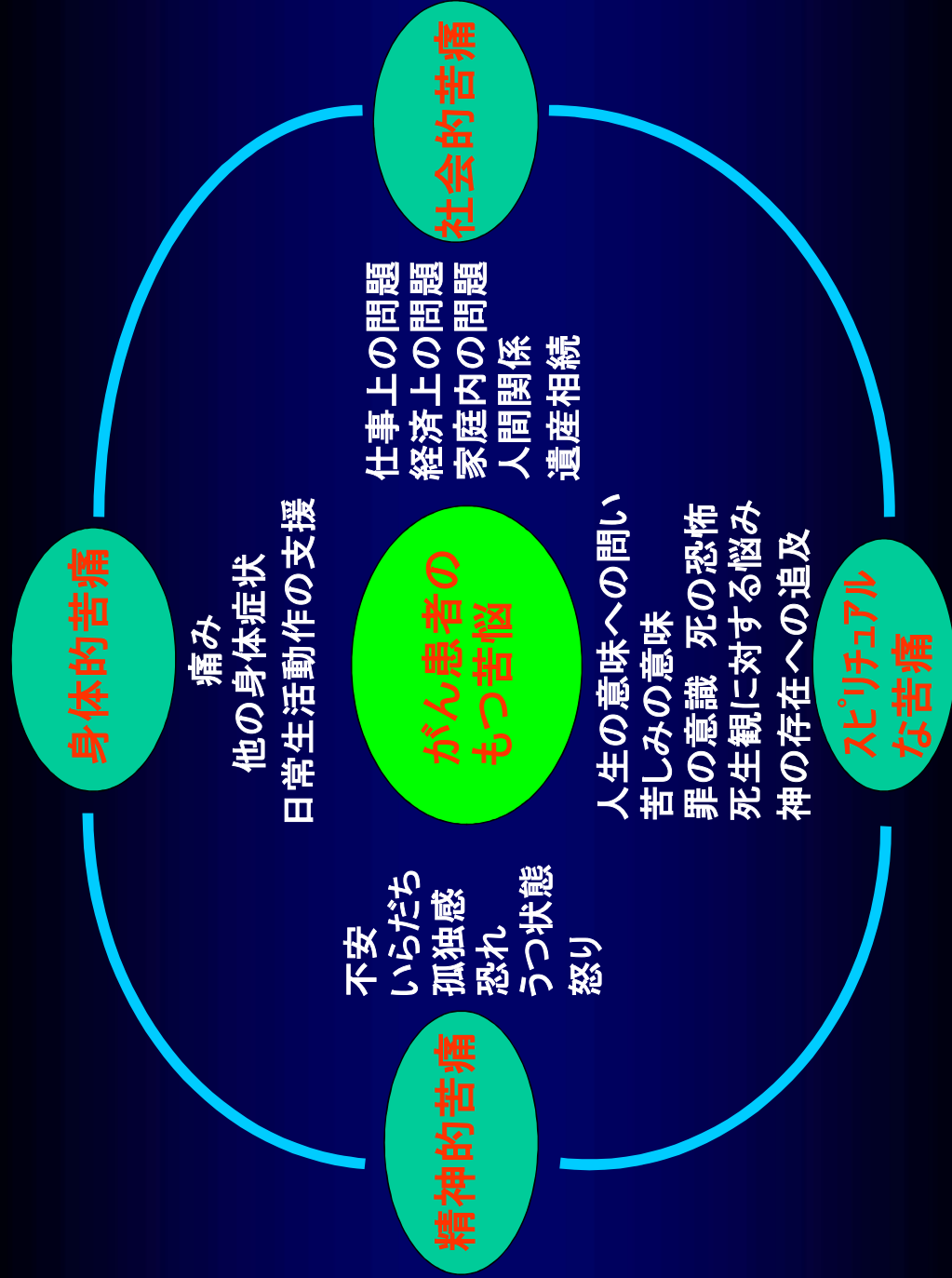
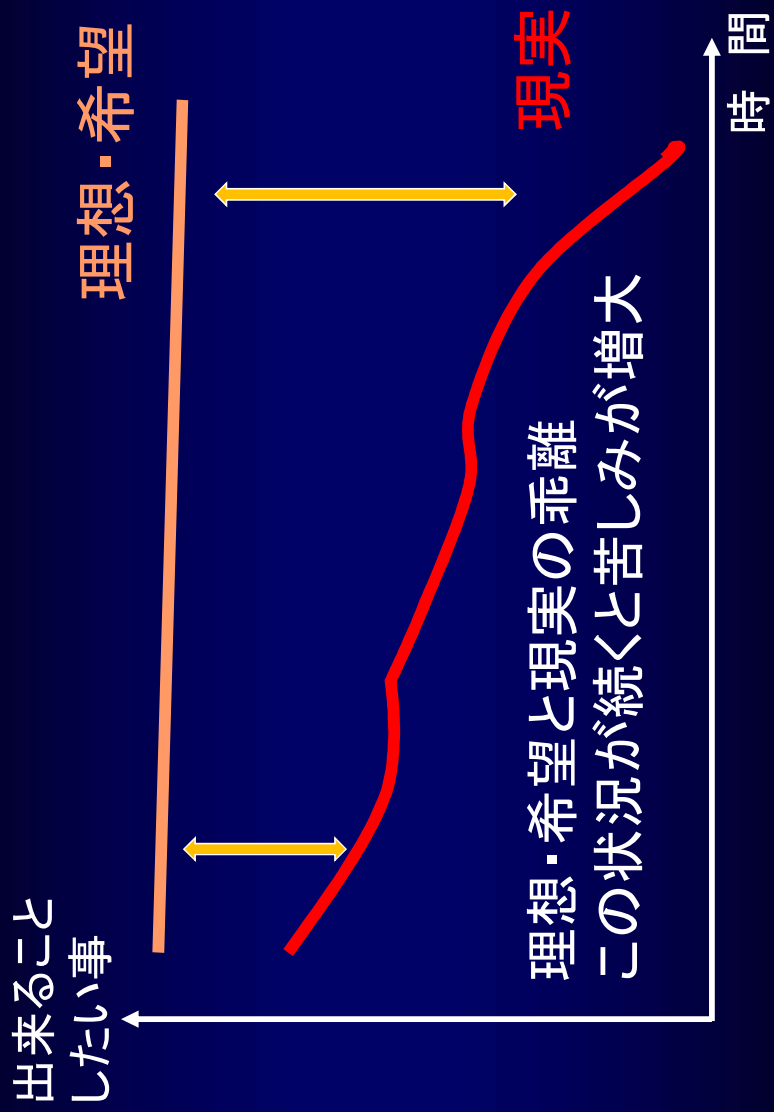
食えないから点滴を
して元気になりたい

医療者

病気が進んで点滴し
ても効果はないし、
かえって苦しいのに...

具体的な進行例





スピリチュアルペインの定義

定義：自己の存在の意味の消滅から
生じる苦痛

(無意味・無価値・空虚など)

スピリチュアルペイン

人生の意味や目的の喪失

衰弱による活動能力の低下や依存の増加

自己や人生に対するコントロール感の喪失や不確実性の増大

家族や周囲への負担

運命に対する不合理や不公平感

自己や人生に対する満足感や平安の喪失

過去の出来事に対する後悔・恥・罪の意識

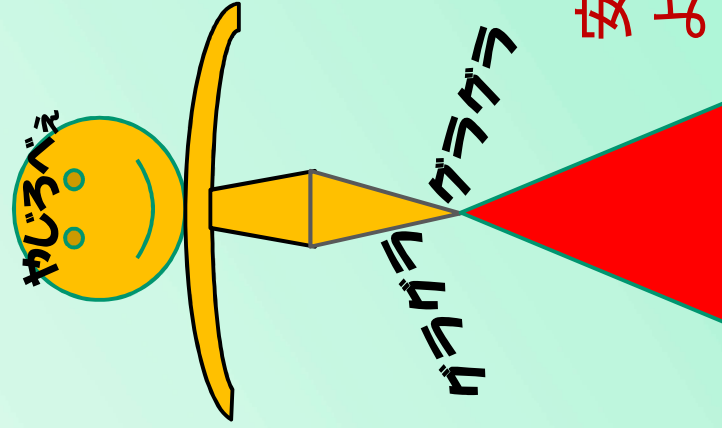
孤独、希望の無さ、あるいは死についての不安・・・

時間性 関係性 自律性

在宅緩和ケアを支える人々

- ・ケアマネジャー
- ・医療相談員（メディカルソーシャルワーカー）
- ・訪問看護師
- ・ヘルパー
- ・訪問入浴
- ・調剤薬局
- ・訪問リハビリ
- ・訪問診療医

家族・介護者は不安が
いっぱい！



- ・具合が悪くなってるね
- ・もう家では無理でしょ
- ・ダメでしょ！入院だね！



安心して在宅ケアが継続できる
ように支援することが大切

不安と安心

何かあったら
どうしよう…!!

予測と対処

予測と対処

予測と対処の範囲をできるだけ大きく広げる

在宅継続困難

疼痛・痛みの増強

せん妄(幻覚・幻視・幻聴・暴力…)

吐血や下血

呼吸苦

倦怠感・食欲不振

おう吐や吐血に際しては
色の濃いバスタオルを敷く



持続皮下注射

補液投与

鎮痛剤投与

鎮静剤投与

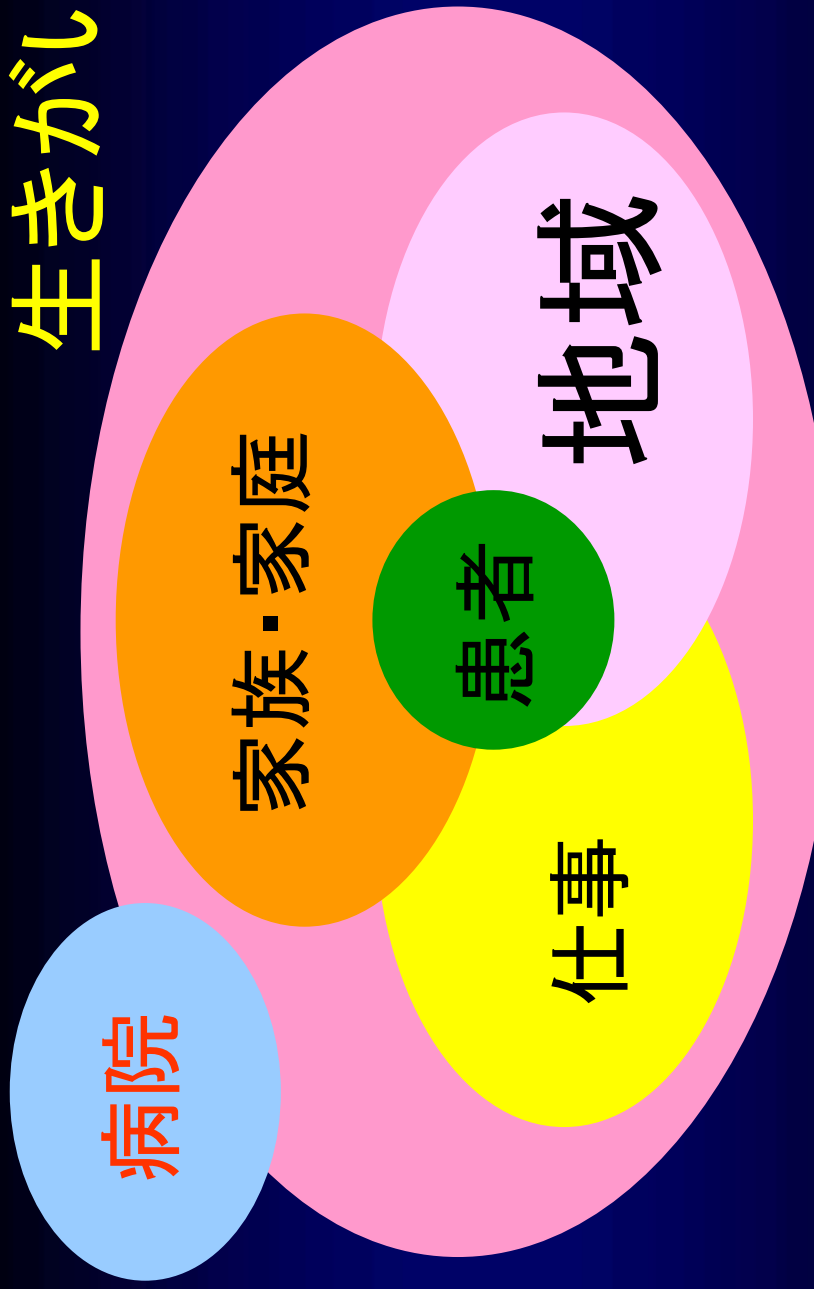
倦怠感対策

食欲不振対策

腸閉塞対策

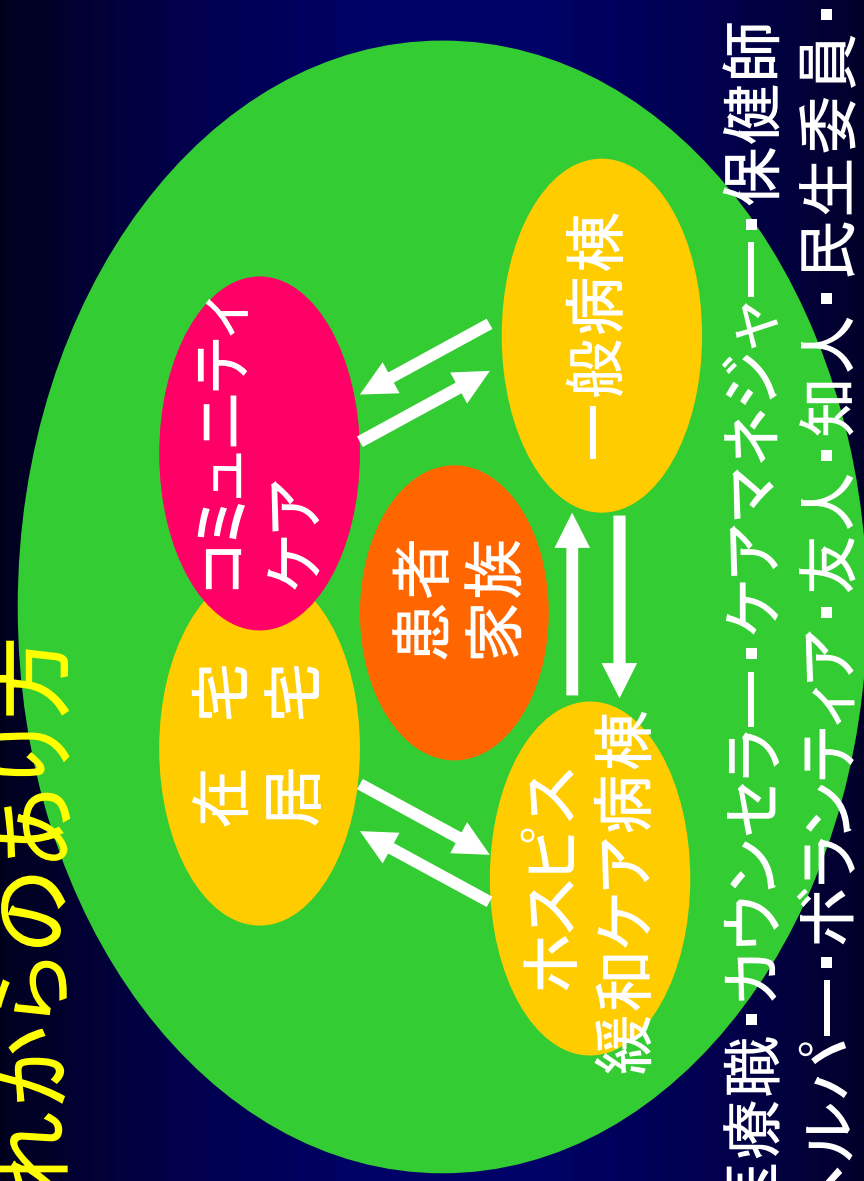


生きがい



家族・地域にあって、人との関わりがとて大切である
家事・仕事は、自分と社会との繋がりを感ずる最期の砦

これからのあり方



医療職・カウンセラー・ケアマネジャー・保健師
ヘルパー・ボランティア・友人・知人・民生委員・
ご近所の住民...

患者は病を持っている生活者である
病を持っていても生活者である

役に立っている(そう思える)ことが
とても大切である



他者の理解



私が相手を理解するのではなく



相手を理解できるように私に教えてもらう

まとめ

- ・ 緩和ケアは、終末期（人生の最終段階）に行われるものではなく、早期から行われるもの
- ・ 在宅緩和ケアは、住み慣れたところで「その人らしく生きる」ことを支えるもの
看取りの場の選択や、死へのカウントダウンではない
- ・ 多職種がその人に応じてチームを組んで支える ⇒ 職種間の連携が重要

実母の在宅ケアをされてきた娘からの手紙（抜粋）

『病院か自宅で看取るか、ずっと悩んでいたが「家で看取れるかも」と自信が付き始めたころ、母は逝ってしまいました。

でも自然に「その日を迎えた」という感じです。
祖母も娘を看取る立場になり、ショックだったかもしれませんが、その最期を自分の目で見ても、母の体を触れることができたのは、自宅にいたからこそだと思います。

介護中、母のために娘たちが手を取りトイレに誘導し、車いすを押して食卓に連れて来てくれました。そしてピアノを聴かせました。父は何十年ぶりに母の手をとって、歩行介助をしました。

母は友達との面会を楽しみにし、看護師さんの処置に満足し、家の匂いや音や空気を感しながら過ごしました、この一年間、特にこの何か月間母は、めいっばい生きたのだと思います。

母が「娘にみてもらえて幸せだ」といつてくれたことがありました。

私も「お母さんの世話ができて幸せだよ」伝えました。

皆さん「家で看取れてよかったね」おっしゃってくださいますが、母は死ぬ場所を選んだのではなく、生きるために家にいたのだと思います。』